

如何様にも生きていく時代に
こびりつく損得勘定

他人の膝の上で浅く息をするたびに
個の境界がゆるみ

零と一の信号が血管に入り込んで
身体の體が削れていく

陸で漂流し

宛てもなく線路を転がっていく途中
地表に足を踏み入れ

土を固めた像を蹴り飛ばしても
机の上のキーボードの冷たさで
心拍数を下げていても

地球は一秒たりともこぼさず
知らぬ顔で瞬きを繰り返している

コンクリートの木々の足元

ほんの静かな酸素の中で

もう一度呼吸を覚え直す夕方
誰もいないことを確かめながら
思い出に酒をかけゆつくりと燃やし
その灰と陽を眺める

それだけが楽しくて

今は呪いたくなるほど何も足りない
夢の骨のかけらを
ただ握りしめている